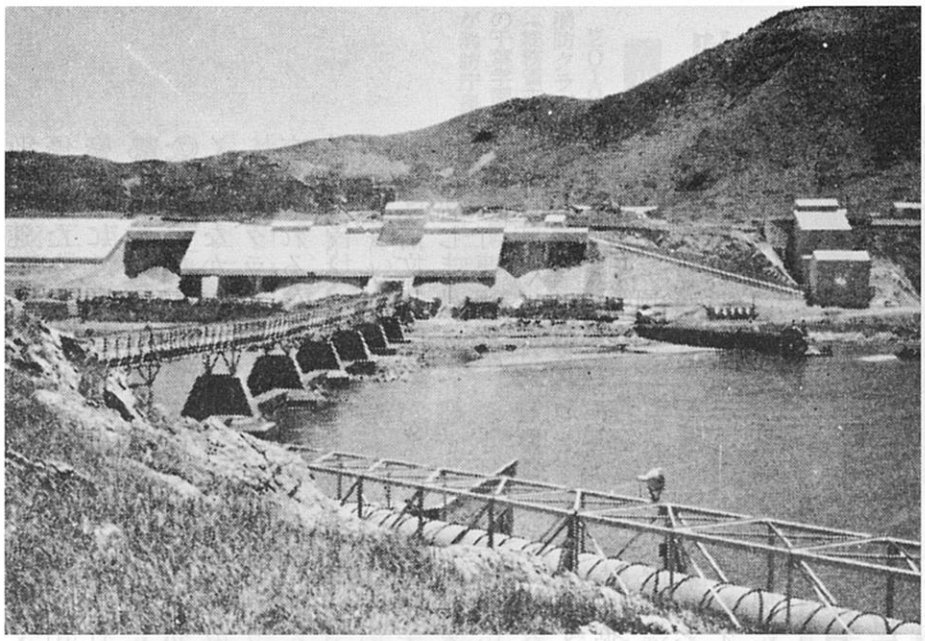
東奥日報 4月20日付8面

〈青森県史〉の窓 177

下北半島巡覧
～自然と資源の宝庫～

中園 裕
（県民生活文化課文化・NPO活動支援グループ主幹）



尻屋の石灰採掘現場＝1963（昭和38）年頃・青森県所蔵県史編さん資料

下北半島は自然と資源の宝庫である。半島を巡覧し歴史的な関わりを概観してみよう。

川内町（現むつ市）の安部城鉱山は、国内有数の産出を誇り大正期の青森県経済を支えた存在だった。閉山して久しいが、周辺には鉱山の煙突や坑道が残っている。

1919（大正8）年、安部城鉱山へ電力を供給するため、川内川沿いに岩谷沢発電所が運転を開始した。100年以上経過した今も現役で、東北電力青森支店管内では最古のものだ。鉱山の遺構と併せ大切な近代化遺産である。

川内川上流の湯野川温泉は歴史が古いが、鉱山が稼働していた頃、大いに繁盛した。

歴史ある温泉と言えば、風間浦村の下風呂温泉が有名だ。規模が小さい割に、大湯・新湯・浜湯など異なる泉源が間近に存在し評判が高い。大湯と新湯の共同浴場は、集落の人々が祭りのお囃子を練習する場所として利用するなど、公民館的役割を果たしていた。

大畑町（現むつ市）の薬研温泉も歴史が古い。大畑川上流の薬研渓流と共に戦前からの景勝地である。1968（昭和43）年に下北半島国定公園に指定され、3年後に薬研温泉が国民保養温泉に指定された。

このほか薬研には森林鉄道の遺構が多い。大畑線の大畑駅や大間線の遺構である二枚橋地区の陸橋など、廃線となった鉄道の遺稿もある。いずれも近代化遺産に相応しい価値を有している。

1924（大正13）年7月、大間崎が対岸に位置する北海道の汐首岬と共に函館要塞に指定された。函館要塞は後に津軽要塞と名称を変えるが、津軽海峡と接する下北半島は「北の要塞」を構成する大事な地域だった。大間線は要塞に軍需資材を運ぶために建設された鉄道だったが、戦争の悪化で実現はしなかった。

下北半島は太平洋と津軽海峡と陸奥湾に囲まれ、海の資源にも恵まれている。脇野沢村（現むつ市）の沖合海上にある鯛島周辺は、対馬暖流と千島寒流の影響で双方の生物が混在する。このため鯛島は海中公園（現在は海域公園）に指定された。

奇岩が立ち並ぶ絶景で知られる佐井村の仏ヶ浦も海域公園に指定されている。陸上交通では不便を強いられてきた佐井村だが、仏ヶ浦の南北に位置する牛滝や福浦には高速船が停泊し、佐井・脇野沢・青森各港への交通路が確保されている。

仏ヶ浦と対照的に、太平洋側の東通村には日本一の面積を誇る猿ヶ森砂丘がある。埋没林や貴重な生物が存在することで有名だが、実は防衛省の技術研究本部下北試験場の敷地でもある。国家の重要な軍事基地であることは、下北半島の特徴の一つと言えよう。

砂丘の北側には尻屋崎がある。尻屋には青森県最古の尻屋埼灯台があり、周辺は寒立馬が放牧されている。その優雅な風景とは対照的に、尻屋は大手の工場が進出する石灰の一大産地である（写真参照）。下北半島が資源の宝庫であることを象徴する光景だ。

自然と資源に恵まれた下北半島は、近代以降資源開発が活発に行われ、軍事エネルギー基地の役割を担ってきた。自然の開発と資源の保護という課題に直面し続けてきた現場とも言えよう。

2016（平成28）年、下北ジオパークが誕生した。しかし、ジオパークは豊かな自然の観光利用や資源の開発のためにあるのではないと思う。自然と共生し、資源の活用と保護を両立する大切な共有の場と見なしたい。

『東京と青森』626号
東京青森県人会、2020年6月号